

No.10

# くまぐら 豊科・熊倉地区

— 神仏の丘と渡し舟を訪ねて —

犀川の川幅が最も狭く渡りやすいことから、熊倉地区は古くから「熊倉の渡し」が設けられ、千国道の交通の要衝でした。その跡では往時の余韻を味わえるでしょう。西に位置する丘陵地には、春日神社や仏法寺などの寺社が鎮座し、歴史のロマンに満ちています。また、懐かしさいっぱい素朴な農村風景が随所に見られるのも熊倉の魅力です。地元熊倉の有志が建てた「史跡由来碑」の石碑22か所をたどりながら歴史散策ができるのも、こならではの楽しみです。



矢原堰の水門



熊倉の田園風景



熊倉の渡し跡



熊倉の渡し跡の記念碑



仏法寺の資料庫内部



熊倉の集落を囲む河岸段丘



奈良の春日大社ゆかりの春日神社

◆コースタイム ※時間は歩速 3km / 毎時としての目安です (休憩含まず)。

スタート 熊倉公民館→約 0.6km \* 12 分→河岸段丘→約 0.6km \* 12 分→矢原堰水門→約 0.9km \* 18 分→ 鶴尾山仏法寺→約 0.4km \* 8 分→熊倉の渡し跡→約 0.6km \* 12 分→春日神社 →約 0.2km \* 4 分→熊倉氏館跡→約 0.9km \* 18 分→ **ゴール** 熊倉公民館

【合計】約 4.2km \* 1 時間 24 分



### ①河岸段丘

熊倉の集落の多くは、河岸段丘に四方を囲まれた台地の上に立地しています。北側から見ると、東西の段丘面に沿って屋敷林が連なっていることが分かります。

### ②矢原堰水門

矢原堰は、穂高・矢原地区の耕地を灌漑するために、承応3年（1654）安曇野初の横堰として開削された大規模用水で、約450畝の水田を灌漑しています。明治45年（1912）に竣工した取水口の水門は近代的な石造りとなっています。

☞安曇野ゆかりの人物 p.26



竣工当時の矢原堰水門

### ③鶴尾山仏法寺

室町時代には七堂伽藍を備えた寺であったと伝わりますが、武田軍の攻略で焼き払われました。後に観音堂が建てられて復興し、江戸時代には「川西三十四番札所」の13番目に組み入れられました。



### ④熊倉の渡し跡

糸魚川と松本城下を結ぶ千国道は、北アルプスの山麓から東に複数の街道筋があり、梓川や犀川を渡る場所も数か所ありました。「熊倉の渡し」は川幅が狭く深さも安定していることから、最適の場所であったとされています。かつては架橋されていた時期もありましたが、橋が流されることも多く、明治期からはむしろ舟渡しが主となったようで、昭和20年代まで利用されていました。



昭和20年代の熊倉の渡し

### ⑤春日神社

神社は奈良の春日大社から勧請され、当初の呼び名は「熊倉御社」であったようですが、明治35年に春日大社から分霊を事実として認められて以来、「春日神社」と呼ばれてきました。舞台保存庫には毎年春の例祭で境内を引き廻される「御船」が格納されています。舞台保存庫の隣には、「熊倉の渡し」で実際に使われていた舟が大切に保存されています。



春日神社の拝殿



舞台の雄姿



舞台保存庫の隣に保存されている渡し舟

### ⑥熊倉氏館跡

熊倉氏は守護小笠原氏に従って永享12年（1440）に関東結城に出陣しています。松本市島内の犬甘氏・平瀬氏の一党と思われませんが、その後の動静は明らかではありません。



館跡に立つ史跡由来碑

## —— 河岸段丘と神仏の丘 ——

熊倉は右下の「熊倉の地形図」にあるように河岸段丘の台地の上に成り立っています。濃い褐色の部分は、仏法寺や春日神社のある丘陵地で、その周りの黄色部分が熊倉集落の多くが立地する面です。断面図で見ると、ここの地形は堅い岩盤に支えられた台地であり、これは太古の地殻変動と犀川の浸食によって形成されたことが分かります。

この地盤の堅さは渡河点として、高さは神仏を祀る場所として、安全な環境を提供することができました。

熊倉氏が氏神として祀っていたとみられる若宮八幡や、京都方面から神主として来往した宮崎高祖橋氏の神霊塚碑なども祀られています。

一方、水の確保には知恵と労力を必要としたため、結果として早くから、この地方では珍しい「条里型水路」による水田が開発されてきました。これを指導したのが、地元の豪族熊倉氏と見られています。

当地には地域の歴史・文化の研究・啓発活動に精力的に取り組む「熊倉歴史文化研究委員会」という団体があり、地域史書『熊倉の歴史』の発行や、熊倉の史跡22か所に「史跡由来碑」という石碑を建てるなどの活動を行なっています。

（この部分は上記の段落と重複する内容を含みます）



解説をする研究委員会の会員

